

## ヴァージニア・ウルフ「ひとつのまとめ」

(『幽霊屋敷』から)

A Translation of Virginia Woolf's "A Summing Up"  
from *The Haunted House* (1945)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

2004年10月8日受理

屋敷の中はあつくなり、ごった返してきて、こういう夜には雨が降り出す心配もなく、ちょうちんも魔法の森深くにつり下げられた赤と緑の果物のようで、ミスタ・バートラム・ブリチャードはラタム夫人を庭へと連れ出した。

戸外の空気と外に出てきてしまったんだわという感覚にサシャ・ラタムは困ってしまった。背が高く、堂々としていたが、かなり無精な感じを与える夫人だった。夫人はそこにいるだけで威厳があり、そのためパーティで何かしゃべらなくてはならないときに、はずれだったなとか、ぎこちないねえといった印象が、夫人のせいだとは思ひとは決していなかった。しかし全くのところそうだった。そして夫人はバートラムといえることが嬉しかった。外に出てもきつととぎれることなくおしゃべりしてくれるのだ。バートラムのおしゃべりを書き留めたら、とんでもないことを話しているとわかる。おしゃべりのひとつとひとつがナンセンスなばかりか、それぞれの話につながりなんてないのだ。ほんとに鉛筆を取り出して、バートラムの言葉を書き取ったら、そうしたら一晩で喋る量は、きつと本一冊になるだろう。それからそれを読んだら、おしゃべりなこの人の知力はいかれてるんだと、思わずにいられないだろう。実際のところはそうではないのだ。だってバートラムはみんなも認める公僕であり、バス勲爵士〔訳注：19世紀創設の「バス勲章」。GCB、KCB、C.B.の三等級がある。〕なのだ。でももっと不思議なのはほとんどだれにでも好かれるということ。バートラムの声にはある音色があった。語気を強める響き、考え方の不調和の中に、ある輝きがあった。丸ぼちゃの黒い顔、コマドリの姿から、なにかあるものが発していた。とらえどころのない霊的なものが発していた。それはたしかに存在し、響き渡り、バートラムの言葉とは分離して、いやいや時にはそれらとは正反対のものとして感じられるのだ。バートラムがデボンシャーに行ったときのこと、宿やそこのおかみ、エディやフレディ、雌牛や夜歩き、社交界の花や人気者、大陸の鉄道や案内書、鰐をつかまえ、風邪をつかまえ、それからイン

フルエンザ、リューマチ、キーツ獲りのことを喋っている間、こうしてサシャ・ラタムは、物思いにふけるのだった。サシャはぼんやりと、男のことをいるだけでいい人と思っていた。男が喋っている間、サシャは、どうしてかはわからないけれど、男のことを、喋っている言葉とは違った、きつとほんとうのバートラム・ブリチャードとしての装いの中に造り上げていった。この人が義理堅い友人だなんて、それからひとのことをよくわかってくれるんだって、どうやったらひとにわかるだろう。でもこうしてバートラムに話しかけると、よくあることなんだけど、その存在を忘れてしまって、サシャは他のことを考えはじめた。

身体をくいとのばして、空を見上げて、サシャが考えはじめたのは、その夜のことであった。急に押し寄せてきたのは、田舎のにおいだった。星明かりの下に広がる暗いしじまの野原。でも、サシャは田舎で生まれ育っていたものの、それも美人に、ウェストミンスターにある、このダロウェイ夫人の裏庭にいと、たぶんその差がありすぎたのだろう、ぞくぞくとするものがあった。まわりに干し草のにおいがした。背後の部屋にはひとがいっぱいだった。サシャはバートラムと歩いていた。足首を軽く曲げて、雄鹿のようだった。扇を使い、堂々として、口を閉じ、感覚を高ぶらせ、耳をそばだて、鼻をふんふんいわせていた。まるで野生の動物、しかしながら、夜のうちに獲物を手に入れる、抑制のきいた動物のようだった。

これが奇跡のなかの奇跡というものだわ、サシャは思った。人類が造り出したものの最高傑作だわ。柳細工のベッド、沼地を漕いでいく網代船のあるところに、これがあるんだわ。そしてサシャは、湿気の少ない、どっしりとして、頑丈な作りの、目の前の屋敷を思った。財宝がいっぱい詰まっている。近くに寄ってきたり、お互い寄り添ったり、また離れたり、意見を交わし、お互いを元気づけたりしている人たちにあわせ、低いうなり音を立てていた。クラリッサ・ダロウェイは茫漠とした夜に向かって屋敷を開け放っていた。水溜まりのあるところには、敷石を敷いてあった。庭の

端までやってきて、庭はほんとうに小さかった、デッキチェアに座ると、ふたりは拝むように、熱心に屋敷を見た。まるで金の槍が身体を貫いたようだった。涙がそこでふくらんで、深い感謝のうちに落ちた。恥ずかしがり屋で、突然誰かに紹介されると、ほとんどなにも言えなくなるくらい、根っから慎ましいのだが、他人に対しては、深い敬意を抱いていた。あの人たちのようになることは、奇跡的なことだった。しかしサシャは自分以外のものにはなれない運命だった。庭に腰を下ろし、こうして口を閉ざし、うっとりとして、自分だけがのけ者にされた人間社会を誉めそやすしかないのだ。かれらを褒め称える詩の断片がサシャの口をついた：みんなは尊敬に値する人たち、立派な人たち、なんといっても勇気のある人たち、夜と沼地を征服した人たち、それらを乗り越えてきた人たち、数々の危険にさらされて、航海を続けた冒険家たち。

運命の悪意か、サシャはみんなに加わることができなかった。でもバートラムが喋り続けている間、腰を下ろし、褒め称えることはできた。バートラムも船乗りのひとりだ。キャビンボーイか、ただの水夫なのか、それとも陽気に口笛を吹いて帆柱をかけのぼる水夫なのかはわからないが、こう考えていると、目の前のなんの木だかが、屋敷のなかにいる人たちにたいしてサシャが抱いている賞賛の気持ちを、枝に浴びせたようになり、びっしょり濡れた。金の滴をしたたらせた。あるいは直立して見張り番に立った。それは雄々しくもどんちゃん騒ぎをやらす連中の一部、帆柱だった。旗がなびいていた。壁際になにかの樽があった。これにもサシャは賞賛の気持ちをおくった。

バートラムは身体が落ち着かなかったが、突然そのあたりを探ってみたくなった。煉瓦の山に飛び乗ると、庭の壁の向こうを覗いた。サシャも覗いた。バケツがあった、長靴の片っ方かも知れない。すぐに幻想は消えた。またロンドンが目の前にあった。広大で、無愛想で、感情のない世界。エンジン付きのバス〔訳注：馬車のバスが導入されたのは、1829年だが、1905年ロンドンにバス会社ができ、1910年ころにはエンジン付きバスが増加した〕。スキャンダル。酒場の前に立つ電飾広告。それからあくびをしている警官。

好奇心を満足させ、少しの間黙っておしゃべりの泡立つ泉を満たすと、バートラムは、椅子をもうふたつ引き寄せ、一緒に腰を下ろすようだれやかれやを誘った。ふたりはまたそこに腰掛けて、同じ屋敷、同じ木、同じ樽を見ていた。壁越しに庭の向こうを覗いて、バケツを見ただけで、いやむしろロンドンが自分たちと

は無関係に動いているのを目にして、サシャはもうあの金の雲を浴びせることはできなかった。バートラムはしゃべり続け、横に座っただれやかれや、それがウォーラスだったか、フリーマンだったか、サシャはどうしても思い出せなかった、そのだれかさんは返事を返していた。彼らのことばは金の薄いもやのなかを通り越して、散文調の日の光のなかに落ちた。サシャは、湿気の少ないどっしりした、そのアン女王朝様式〔訳注：18世紀初頭、アン女王治世下に見られた東洋趣味の控えめで、古典主義的な装飾・建築様式。ここではおそらく19世紀にリバイバルした寄せ棟式屋根、広い窓をもつ屋敷を指しているのだろう〕の屋敷を見た。学校のころ、ソーニー島や網代船に乗った人、牡蠣、マガモ、もやのことを読んだのを一生懸命思い出そうとした。でもそれは排水と大工をうまく使えばいいだけの問題のように思われた。それにこのパーティ、夜会服のひとばかり。

それからどっちの見方がほんとうなのだろうかとサシャは自問した。バケツも、半ば明かりをつけた、半ば明かりを消した屋敷も見えた。

慎ましやかなやり方で他人の知恵と力で造り出していた、そのだれかさんにこの質問をした。答えはよく偶然にやってきた。年老いたスペインエルがしっぽを振って答えるのを知っていた。

さて、メッキと威厳をはぎとられた木が答えを示してくれるようだった。その木は野原に生えている木、沼地のたった一本の木となった。サシャはよくそれを見たことがあった。その枝の間から紅く染まった雲を、銀のひかりを四方八方に投げかける、枝越しの月を見たことがあった。でもどんな答え。そう、魂はもともとひとりぼっちということよ。サシャには自分のなかになにか生き物が動き回って、逃れ出そうとしている動きを感じ取られていた。その生き物をサシャはちょっと魂と名付けたのだ。ひとりもののハタオリドリよ。あの木の上にとまった鳥よ。

でもバートラムが親しげに、だってずっと知り合いだったから、サシャの組んだ腕のなかに自分の腕を入れて、ぼくたち失礼しすぎているよ、入らなくちゃ、と言った。

そのとき裏道か酒場か、男のものとも女のものともわからない例の怖い声が、響き渡った。金切り声、叫び声だ。そうしてひとりもののハタオリドリはびっくりして、飛び去っていった。それは、サシャが自分の魂と名付けたものは、だんだん大きく大きく輪を描きながら。そしてとうとう石を投げつけられて飛び上がったカラスくらいに遠いものになった。